

集団構造に関する研究

— Status Congruency の効果の検討 —

榊 原 國 城

I. 問題および目的

或る個人が或る時に占める或る特定の系列内の位置は通例“地位 (status)”と言われる。この地位は単一の次元のみならず種々の次元に関してこれを決めることができる。

Benoit—Smullyan, E. (1944) は、これらの地位が或る共通の水準に達する傾向のあることを指摘し、これを“地位の平衡化仮説”と呼んだ。彼の仮説は Fenchel, G. H. et al. (1951) によって検証され、ほぼ支持されたが、この仮説から導かれて次のような問題が提起された。即ち、或る次元における地位と他の次元における地位の一致度の大小は個人の社会的行動にどのような影響を及ぼすのかという問題である。これはいわゆる status congruency とその効果に関するもので、Adams, S. (1953), Lenski, G. E. (1954, 1956) らをはじめ、多くの心理学者、社会学者達によって扱われてきた問題である。これらの諸研究は、種々の地位次元上のランクが不一致の時、その個人には何らかの心理的圧迫が生じ、それが彼の社会的行動に影響を及ぼすことを指摘した。しかし、これは扱われる地位次元の如何にかかわらず一義的に生ずる効果ではなかった。また、対象とされた被験者も一般成人か大学生に限られており、特に実験的な研究では相互に未知な者から成る集団が用いられるのがほとんどであった。

しかるに、社会的行動の理解において、status congruency の理論の適用範囲をより広いものにするためにはこれまでに取り上げられた以外の地位次元、被験者を考えることが必要であろう。このような観点から、本研究は、予め構造化されている学級集団の成員を被験者とし、地位次元の一つとしてソシオメトリー上の地位 (社会測定的地位) を取上げて status congruency の効果の検討を目的とする。

II. 実験 I

被験者は中学2年生の男女生徒で、先づ、予め施行しであるソシオメトリック・テストによって各学級成員のソシオメトリー上の地位が算出された。そしてこの結果をもとに各学級から、同性の者3人から成るグループが抽出された。実験はこれらのグループに対して行なわれた。被験者は2種の問題に関して集団討議を行なうよう指示され、集団としての一つの結論を出すよう求められた。地位次元のもう一方はこの集団討議に関連するもので、指示により操作された。即ち、集団決定の際に用いる投票権を5, 3, 1のように与え、各成員の意見を重みづけしたのである。このようにして各グループは Table 1 に示すような4群に分けられた。I, IV 群が status congruent group. II, III 群が incongruent group である。

TABLE 1 Homogeneity and Heterogeneity of Status Structures Resulting from a Two-Dimensional Plot of Status Congruency Inductions

Status Dimension Status Structure Person	I		II		III		IV	
	Soc. Het.	Vote Het.	Soc. Het.	Vote Hom.	Soc. Hom.	Vote Het.	Soc. Hom.	Vote Hom.
A	H	H	H	M	M	H	M	M
B	M	M	M	M	M	M	M	M
C	L	L	L	M	M	L	M	M

Letters of H, M and L within cells represent ranks of persons on the indicated status dimension.

集団構造に関する研究

前述の地位の平衡化仮説に従えば、incongruentな個人は2種の次元のランクを一致させたいという欲求を持ち、いわゆる status striving を示すことが予想される。しかし、この欲求充足の困難な場合にはそこに conflict が生じよう。そこで、次の仮説がたてられた。

仮説： status incongruent group は、congruent group に比して、より多くの対人的葛藤を示す。

仮説は2×2のデザインの分散分析によって検証され

た。Table 2は集団討議場面の観察記録と質問紙への反応の結果であり、またその分散分析表は Table 3に示される。Table 2において、表中の数値が大きいほどそのグループにおける対人的葛藤の経験がより多くなっていると解されるが、結果はほぼ仮説通りであるように思われる。しかし、Table 3で明らかなように、congruency の効果が統計的に有意であったのは4種の資料中1種だけであった。

TABLE 2 Mean Ratings of Observers and Post-Questions in Groups Categorized as to Status Congruency

Behavior Rated and Item Description	Congru.		Incongru.	
	I	IV	II	III
No. of Negative Remarks per 5 Minutes of Discussion (Bales Categories 10, 11, 12)	0.50 (0.60)	0.65 (0.38)	1.00 (0.71)	1.13 (0.57)
Difficulty of Speech	2.54 (0.82)	2.66 (1.29)	31.2 (1.00)	2.61 (0.95)
Pleasantness for the Group	2.33 (0.55)	2.27 (0.60)	2.66 (0.80)	2.66 (0.56)
Satisfaction with Group Activity	2.50 (0.82)	2.55 (0.80)	2.79 (0.76)	2.66 (0.78)

The number in parentheses shows SD.

TABLE 3 Analysis of Variance of Observer Ratings and Post-Questions in Groups Categorized as to Status Congruency

Behavior Rated and Item Description	Source of Variance	Mean Square	F
Negative Remarks	Vote	0.01	0.02
	Sociometry	0.07	0.18
	Congruency	0.83	2.06
Difficulty of Speech	Vote	2.13	2.08
	Sociometry	0.82	0.80
	Congruency	1.51	1.48
Pleasantness for the Group	Vote	0.02	0.05
	Sociometry	0.02	0.05
	Congruency	2.79	6.78*
Satisfaction with Group Activity	Vote	0.17	0.28
	Sociometry	0.03	0.05
	Congruency	0.86	1.38

Congruency=the interaction (Vote X Sociometry)

* = p < 0.025

Ⅲ. 実験Ⅱ

実験Ⅱは、教示によって与えられた投票権を実際に使用することのできるような実験事態に被験者を導くよう計画された。また、本実験では、投票権を5, 3, 1と与える場合(条件A)と、4, 3, 2と与える場合(条件B)とで status congruency の効果に差が生ずるかどうかも検討された。仮説は2種たてられた。一つは実験Ⅰとまったく同様のものであり(仮説1)、他の一つは投票権の配分法に関するものであった(仮説2)。

仮説2: status congruency の効果は、投票権が5, 3, 1と与えられた場合の方が、4, 3, 2と与えられた場合よりも大きい。

被験者は中学1・2年生の男女生徒で、実験Ⅰと同様、先づ、ソシオメトリー上の地位のランクを基準として3人のグループを構成した。各グループにおいて被験者は投票権についての教示を受け、それぞれ4種の実験群に分けられた。与えられた課題は次のようなものであった。即ち、各被験者は、スライドによって提示される、“線分の長さ”、“人物写真”、“ロールシャッハ図

版”の3種の刺激に対しての判断が求められた。最初の個人的な判断の後、投票によってグループとしての判断が決定された。但し、投票用紙に記入する回答は最初の個人的判断におけるそれとは異なってもよいと教示されていた。3人の投票用紙は各試行ごとに開票され、その都度結果が全員に知らされた。

投票行動の分析の結果、各成員の判断の間には十分な不一致が見られ、実験Ⅱにおける手続きがほぼ意図された効果を生じたことが確められた。仮説の検証は実験Ⅰと同様に、観察記録と質問紙への反応の分析によって行なわれた。この結果の一部は Table 4 および 5 に示される。5種の資料のうち仮説1を支持するものは3種のみであったが、全体としては status congruency の効果を窺わせるに十分であった。しかし、投票権の配分法に関する仮説は、5種の資料のうち、2種までがそれを支持していたが、他の3種は仮説を支持することができず、とりわけ、その中の一つは仮説とは逆の結果を示していた。これは、投票権の配分法による差違がそれほど重要でないことを意味するものであろう。

TABLE 4 Mean Ratings of Observers and Post-Questions in Groups Categorized as to Status Congruency

Behavior Rated and Item Description	Congr.		Incongr.					
	I		IV		II		III	
	Cond. A	Cond. B	Cond. A	Cond. B	Cond. A	Cond. B	Cond. A	Cond. B
No. of Negative Remarks	0.69	1.17	0.76	0.94	0.87	1.44	2.44	0.39
Pleasantness for the Group	2.33	2.33	2.73	1.66	2.33	2.53	2.25	2.44
Satisfaction with Group Activity	2.33	3.35	2.46	2.42	3.13	2.07	2.75	2.83

TABLE 5 Analysis of Variance of Observer Ratings and Post-Questions in Groups Categorized as to Status Congruency

Behavior Rated and Item Description	Source of Variance	Mean Square		F	
		Cond. A	Cond. B	Cond. A	Cond. B
		No. of Negative Remarks	Vote	1.30	0.76
	Sociometry	1.55	1.88	1.55	1.04
	Congruency	0.13	0.07	0.13	0.04
Pleasantness for the Group	Vote	0.85	1.16	1.67	2.83
	Sociometry	0.41	2.00	0.81	4.88*
	Congruency	0.78	7.32	1.53	17.85**
Satisfaction with Group Activity	Vote	0.96	8.75	0.83	6.48*
	Sociometry	0.22	0.00	0.19	0.00
	Congruency	4.21	2.01	3.63	1.49

Congruency = the interaction (Vote × Sociometry)

* = $p < 0.05$

** = $p < 0.01$

Ⅳ. 考 察

以上の結果は、ソシオメトリー上の地位と投票権上の地位とについての status congruency の効果の存在をほぼ確認するものであったが、仮説は完全な支持を得ることができなかった。この点に関して、次のような観点から考察がなされた。

① 2 地位次元間の関係

集団内の各成員は、それぞれのランクに在る者の行動に対して、何らかの期待を持つと考えられる。status congruency の効果を検討する場合、各地位次元に由来するこれらの期待が相互は positive な連関を持っていることが必要であるが、本実験の場合、それが必ずしも十分でなかったことが予想される。

② status congruency の仮説の再検討

一般に、人はより高い地位に在ることを望むであろうことを仮定すれば、二つの次元について両方共高いランクを得ることが不可能な場合、その一方だけでも高いランクを得る方がどちらも低い場合よりも望ましいと考えることができる。即ち、L-Lは、本実験では congruent な組み合わせであるが、これが必ずしもその個人にとって満足な状態ではないことが予想される。このことは実験前と実験後におけるソシオメトリック・テストへの反応の変化の分析によって確かめられたことである。この結果は、ランクの高さを無視して機械的にランクの一致度のみで congruency を定義することの不適切を意味するものである。